

互いの意外 —— 阿部葉子

10年ほど前、一緒に仕事をしていたRから電話があった。Rとは、センターと呼ぶ日本語関係機関でクラス活動や教材作りのあれこれを夜遅くまで一緒にやっていたことがある。教室をめぐる随分いろいろな議論をした。センターが閉所してからは、連絡を取り合うこともなかったのだから、何かと思ったら、近くに引っ越してきたので、少し話がしたいということだった。

「お互いこんなに近くに住んでいるなんて意外ね」とRは言い、近況を語った。ここ数年間、他機関で教えていたが、院に入るために準備し入学が決まったこと、緊張で不眠になっていること、近くの山道を散歩していること、それから、結婚したことなどなど。相変わらず、「なぜなら」と理由を述べる話し方は変わっていないけれど、会っていない間にいろいろな変化があったのだなと思って私は聞いた。そして、「教えるのはもういい」というRのことばに驚いた。120パーセントの準備をし、情熱を傾けるRから想像できない意外なことばだった。しかし、急に距離が縮まった感じがして、私は自分の院生活のもたつき振りを披露しながら、「実践」から「研究」へ、「研究」から「実践」へと行き来する「実践研究者」という教師の生きかたもあるからと、話をしているうちに、今まで私の知ることのなかったRと向き合っているような気がしていた。

最近、考えるのは、コミュニケーションが成り立っているといえるのはどのようなことなのかということである。ことばが交わされていても、人がさまざま所で他者からの疎外や孤立感を強めるのはなぜなのだろうかということを含めてである。同じ場所に、居合わせて、仕事や家庭生活をやっていくような場合、ことばを出し合うことはあっても、受け止めるとのないまま、どこかで聞き流しているのだろうか。ことばをぶつけ合いながらも、すっかりすれちがっているのだろうか。自分の経験を思い返すと、そのどちらもありそうだ。そんなふうに、人は話したり、

聞いたりする中で、私のことばは伝わっているのかとか、私のことばはどうしたら受け止めてもらえるのかとか、どのように届いたのかとかと煩わしい日は一日もないだろう。

しかし、ことばが互いを近づけ、動くことのないと思っていた互いのつながりを動かし、考えが変わっていくこともある。そのようなときは、自分に向けられたことばの中に自分との共通点を見つけたり、違いに気づきながら、相手のことばに耳を傾けている。そして、自分の考えと相手の考えを重ね合わせて、自分が何を考え、何を感じ、何を喜びとするのか届けようと、自分の中からことばを紡いでいる。当時は、R とは一日の長い時間を過ごし、情熱の差こそあれ、いわば自分の信念と思っていたことをぶつけあっていた。しかし、何が違うのかといえば、教師とか、教えるといった役割を背負い込み、結論をリニア的に見出そうと主張することに一生懸命だったのかもしれない。R 個人の生き方や、考え方の投影されたことばに耳を傾けているうちに、R の像や R とのつながりが作り変えられていったのだと思う。

教室のことばの活動にも同じことが言えるのではないだろうか。さまざまな価値や考えを持った人々が出会い、互いの違いにじっくりと耳を傾ける中で、新しい関係や意味が作り出されていくことがある。そのような場を私は作りたいと思っている。互いの感じた「意外」が互いを接近させたようだ。R はこの春、院の生活をスタートさせている。

「口の字型」問題 —— 新井久容

うちの師匠が「口の字型」にこだわっていることは、もちろん知っていた。インターンシップのコメンテーターをしたときも、師匠のコメント表には、ただ一言「机の配置が云々」としか書かれていなかった。そう、「口の字型」とは、例の、教室の机の配置のことである。

今期、初めて「文章表現」というクラスを担当している。いわゆる「技能別」というクラスである。最初の授業が終わった日に、偶然、エレベーターで師匠と一緒にになった。曰く、「あそこの教室では、何かむずかしいことやってんの?」。幸か不幸か、「その」教室は、7階研究室への通路。嫌でも目に入ってしまうところにある。私は、黒板を背に、学生の前に立って対応していた。第一週目は、授業のオリエンテーションである。1 コマを前半・後半に分け、簡単な説明と Q & A を繰り返す。正直言って疲れた。「1 対 100」(大げさ)でやっているような、自分がすべ

てを引き受けなければならないような。そんな緊張で体がこわばっていた。私の硬さが学生にも伝わっているのが、わかった。

二週目に、「ロの字型」に変えてみた。その日に、なぜかまた師匠に会った。机の話になると、言われた。「だって、新井さんの表情が違ってたもん」。何でわかるんだろうと思った。確かに、あの時間、私がいちばんのびのびしていたように思う。自分のことばが、どこかへ行ってしまうのではなく、誰かが打ち返してくれているという安心感があった。一つのボールをめぐって、いろいろな手が出てくるのが見えた。もしかしたら、「ロの字型」は「総合（活動型日本語教育）」の授業、と版で押ししたように考えていたのかもしれない。そういう意味で、「総合」を特別扱いしていた。しかし、教室の中で自分が何をしようとしているのか、ということを考えるならば、机も、それにあわせて動くのは当然である。机の配置に内容をあわせるわけではないのだ。机の配置ひとつと侮ることなかれ。

三週目の今日、授業は紛糾した。メーリングリストを利用した二十数人分のレポートの受信が大混乱を引き起こしていた。それに苛立った学生が口火を切って、授業は予期しない議論へと入っていった。「この授業は、『書く』クラスなのに、どうして他の人のレポートを読まなければいけないのか。コメントしなければいけないのか」、「この授業は、口頭表現のクラスみたい。もっと書きたい。書いたものを先生に直してほしい」、「この授業は、同じレベルでやっている『総合』のクラスとどう違うのか」… あーあーあー、口火を切ったのは、「信頼」していたはずの先期の「総合 3E」受講者たちだった。私は、「技能別って言うけれど…」と、応戦一方だった。しかし、学生のひとりから、ある提案がなされたのを期に、押し寄せてきたように見えた問題は、再び全体へと返っていったような気がした。火をつけた学生も、いつの間にか一緒になって、今後の授業の進め方についてのコンセンサスづくりに参加していた。予定していた活動など吹っ飛ばしてしまったのも「ロの字型」、でも、クラスの「地」を固めようとしたのも「ロの字型」なのだろうか。

始まったばかりでまだ何とも言えないが 面白いメンバーが揃っている。このクラスはまた忘れられないものになるかもしれない。「ロの字型」とともに。

近況 —— アンドラハーノフ・アレクサンダー

昨年 9 月に“再入院おめでとう”と祝福の言葉を浴びながら博士課程に進み、あっという間に半年が過ぎてしまった。卒業と、私の場合、それに直結する入学の慌しさが心の中で収まり、原点に立ち返って研究に取り組む余裕が出てきた。

博士課程では、今後の計画の構築と、実際それをどのように実現していくかという問題が重要である。メディア・リテラシーを普遍的な能力として考える私にとっては、その能力をどのように実用的な世界に結びつけ、そしてその能力を日本語教育の実践の場でどのように育成できるかということを考え、整理する半年だった。

理論と実践の両立は、常に心掛けるようにしている。理論では、リテラシーとは何かという概念の再検討、教室のデザイン、協働、評価を含めた学習論を軸とした言語教育観の見直しと、メディア・リテラシー論との関係を考える必要がある。実践では、現在東京国際大学において、シラバス作成から授業の設計と参与観察による活動の活性化とデータ収集まで、具体的に自分の理論の有効性を検証しようとしている。今後の1年間の活動を勝負所と考え、四苦八苦しつつ計画を練り、満足な結果を出すべく日々努力している。

一方、研究室での活動も忙しい。博士課程の1年生が担当することになっている早稲田の日本語教育学会が過ぎ、その他に研究室の雑誌の原稿募集から編集までの作業に追われた日々は未だ記憶に新しい。人を動かす仕事の大変さがジワジワと伝わり、責任感がひしひしと湧いて、常に気持ちが忙しない。何とか自己卑下に陥らないよう、自己催眠をかけていた。やはり勉強モード、仕事モード、遊びモードのように自分の心のスイッチを巧妙に切り替える能力を身につけることは難しいが、生きれば生きるほど重要な力である。スイッチの切り替えが多少はできて、免疫のまだない事項が現れると、精神的な疲労がたまる場合もある。ワンクッションを入れるために内面磨きを絶えず心掛けるべきだと思った。

修士から博士課程に進んでからは、楽しく自分の世界に浸ろうと思っていた。だが、それは“人間”である限り不可能だということを実感した。研究室の活動と自己の研究とを、常にコミュニケーションを恐れずに、余裕を持って続けていきたい。今度こそ晴れやかな“退院”に向けて（笑）…

考えの根拠を示すことの意味 —— 市嶋典子

考えてみると、今学期は「総合活動型日本語教育」に多く関わってきた。週一回の「総合」でティーチングアシスタントを、通称「毎日の総合」のβクラスでボランティアを

そして、海外の大学や国内の日本語学校で「総合」を設計し、実践する機会を持った。どれもそれなりに大変で、何度も自己嫌悪に陥った。活動は私に重くのしかかり、大きなプレッシャーでもあったが、一方で、そのおもしろさ、奥深さも実

感した。

活動の中で刺激的だったのは、学生から、「なぜ」を付き返されてきたときだった。話し合いが進んでいくうちに、互いの考えていることの根拠の示しあいになってくる。すると教室にピリッとした緊張感が生まれ、みんなの頭と言葉が冴え渡って来るのが分かる。自然と私の気持ちも高揚してくる。でも、そこで油断していると、「じゃあ、先生にとっての日本語教育って何ですか」と（どこかで聞いたような）、不意打ち質問にあう。その問いにしどろもどろで答えると、「なぜそう思うんですか」と続く。ここで私と学生の立場が逆転する。私は、彼らに「自分にとっての日本語教育」を伝えるために、考えをまとめ、それを表現するための言葉を探すはめになる。自分の言語教育観を分かりやすく、明確に表現できれば良いのだけれど、いつもなかなかスムーズには説明できない。結局、何度もやりとりを重ねて、私の考えをなんとか理解してもらえるようになる。そんなこんなで、気が付くと、私も学生と一緒に必死に自分の考えの根拠を探り、表現していたりする。

活動の中で、このように「なぜ」の答えを示すことは、私自身にも何度も突き付けられた。こうして、教室活動を通して、学生だけではなく、自分自身と向き合うようになっていった。向き合う中で、いいことばかり見えてくれば良いけれど、なぜか欠点ばかりが目についてくる。それで、自己嫌悪に陥る。でも、その欠点をなんとか改善しようと、自分なりに試行錯誤する。「向き合い」「自己嫌悪」「試行錯誤」の繰り返しである。この仕事を続けていく限り、たぶん、このサイクルが途絶えることはないだろう。なんとも気が重い話である。それでもめげずに、学生と共に自己の考えの根拠を探り、表現していきたい。なぜなら、それが、私の教室活動のあり方、考え方の見直しにもつながるからだ。そしてそれが、日本語教師としてだけではなく、人間としても成長させてくれるのではないかと考えている。

学習者ニーズと教師としての存在意義 —— 牛窪隆太

最近、学習者のニーズには多面性があるのではないかと考えている。

マズローが唱えた「欲求階層説」ではないが、「日本語を勉強したい」という学習者の欲求の裏にあるものは、それぞれ個人差があることを当然としても、一面的ではない。

多くの学習者は、社会的、かつ個人的な経験の文脈において、漠然と「日本語を勉強したい」と感じている（あるいは感じさせられている）のではないか。それは学習者の意識下で、決して一面的に存在しているのではなく、多面的、複合的なも

のとして存在していると考えるのが妥当であろう。

つまり、複数の学習者が「日本人のように漢字が読めるようになりたい」と同じように言ったとしても、それぞれが漢字を読めるようになりたい理由は異なるだろうし、また、日本人のように漢字を読めるようになりたいというのが、それまでの経験のどのような側面からきた、その学習者にとってどのような意味を持つものなのかによって、まったく異なるものになるのではないかということである。学習者にしても、日本語を勉強することが自分の人生においてどのような意味を持ち、それがどのようなニーズとなって表出してくるのか、を常に考えながら学習しているわけではないだろう。

そうすると、日本語教育においてしばしば強調される、学習者のニーズとは一体何を（その複合体のどの側面を）意味しているものなのかがわからなくなる。

確かに、学習者を前に授業活動を考えるとき、そんな得体の知れない学習者のニーズなど全て無視してしまえばいい・・・などとは到底言えなくなるのだが、それでも、一度や二度のアンケート調査で得られた結果を基に組み立てられた教室活動が、どれほど本当に学習者の考えを表したものになっているのか、またそのように授業活動を組み立てることにどんな意義があるのかを考えると、それは非常に疑わしいと感じる。それは、教室担当者として、教室活動に対する責任を全面放棄することになると考えるからかもしれないが、教室活動の土台を学習者ニーズに据えることによって、教師としての自分の存在価値を見失ってしまうように思えるからかもしれない。

それでは、一体どうすればいいのか。

それは、教室に入り学習者と向き合いながら考えるしかない。こう書いてみると、諦めに近い響きもあるが、本当にそうするしかないと思う。学習者ニーズに迎合するでも反発するでもなく、学習者の考えを聞き届けた上で、こちらの考えを示し、どうすればよいかを教室参加者で考える。その上で、こちらが提案する形にするのであれば、その意義を理解してもらえるように働きかけ、随時、軌道修正を加える。そのような方向でしか、自身の教師としての存在価値を保ちつつ、学習者と、強いては学習者ニーズと向き合うことはできないのではないか。

新しく赴任した海外の学校は、いわゆる予備教育機関であり、大学などの高等教育機関と比べると、学習者ニーズという言葉により強い力が与えられる場所であるかもしれない。ここで自分がどう考え何ができるのか、これからの課題である。

一人一人の声の発信と発見 —— 遠藤ゆう子

2004年、入国管理局が交付する就学ビザの交付率が極端に下がった年。留・就学生に対する目が厳しくなり、国家治安を理由に、また約20年前に当時の中曽根首相が掲げた留学生10万人計画が達成されたこともあり、2004年は就学生締め出し政策となったかのようなようだった。昨年、今年は2004年ほどの厳しさは感じないが、あの頃から考えていることが私にはあった。

就学生に対するマイナスイメージを社会からどうしたら払拭できるだろうか。真摯に日本留学をして学んでいる人達が大多数であって、一部の悪い人のイメージを全就学生にあてはめて解釈したり報道する仕方に何とかメスを入れたい。私は善良な多くの学生と身近に接しているから、否、逆にそういう学生しか知らないから、当時の解釈や報道に大きな違和感と怒りを抱いていた。どうしたら就学生に対するステレオタイプのマイナスイメージを取り除けるのか。それは「真面目な留学生が多いんです!」「彼らはきちんと責任を持った行動をしています!」「夢を持って勉強をしています!」と訴えていくことも一つの方法かもしれない。だけどそれでは不十分だ。「真面目」とか「責任を持って」という言葉を使わなくても、彼らの考えていることや彼らの視点を直接、生のまま伝えていくことで彼らの姿が理解できるはずだと考えていた。誰かが代弁者となる必要はない。彼らのありのままをストレートに発信していくことで、それを受け止めた人は代弁者の声を聞くよりもっともっと多くのことを感じるのだ、と。

そこで浮かんだ構想。

日本語学習者も日本人も隔てることなく参加できる意見投稿・発表サイトを作る。あるテーマに対する考えを投稿し掲載され、掲載された文章に絡んで更に意見を発信していくことで対話の場となるというもの。意見を書き込むサイトというのは数多くあれど、様々なバックグラウンドを持った人が考えを発信することを視野に入れてページを作り、テーマを掲げているものはほとんどない。その点を克服したサイトを作り、そこで一人一人の声が発信され対話が持たれることで、お互いの、彼の、私の、彼女の、人となりや視点・考えが見えてくる。「責任を持った」「夢をもった」と代弁するんじゃないくて、「責任」の中身、「夢」の中身を発信し発見する。

このような企画をずっと温めてきた。そして2006年春、ようやく形になりそうだ。

どうか多くの人に対して中身の発信ができるサイトになりますように。そして誤

解や先入観で不幸になる世の中から変化し、少しでも相互理解につながりますように。勿論願うだけじゃなくて、それに向けたサイトへと成長するよう工夫していきたい。一人一人が発信する声を大切にしていけることで、壁は取り払われていくはずだ。

近況 —— 大西博子

健康のために、何年かぶりの水泳をはじめた。ひさしぶりのプールレースは少し長く感じた。浮力に全身をゆだねると、楽に気持ちよくすいすい泳げるのだが、いつもどこか何か意識してしまって、身体に無駄な力がかはいつてしまいうまく泳げない。うまくやろうと意識しようとすればするほど、どこかに力がかはいつてしまう。その意識があるから、非常に苦しいのだが、仕方がないので、自分で考えて工夫するしかない。しかし、そうしながらも、毎日、少しずつ続けていると、いつの間にか、以前よりも、泳ぎがうまくなったかなあと思う。だんだん無駄な力も抜け、姿勢も全体的によく楽になったと思う。

それと関連するのかもしれないが、よくわからないが、今期は、研究室の異なるグループでひとつのクラスを設計するという実践研究にチャレンジしている。最初の話し合いの日は、互いの言語教育観の差異に話し合いもまとまらず、先が見えないような途方もない気持ちになった。しかし、次の話し合いでは、いろいろな人の意見をもらいつつ、以前よりも、互いの考えを遠慮なくぶつけあうことができ、そこから少しずつではあるが、何かの方向性が見出せそうな小さな希望をみいだせた。とにかく、今ある状況で、4人で、なんどもことばを重ね、考えをぶつけあいながら、そこから少しずつ、方向をたぐり進んでいくしかないのだった。

当たり前なことだが、ひとりひとりが、互いの考えを、ことばにして、それをぶつけあい、少しずつでもあきらめずに、今の問題を乗り越えていくことが大切なのだった。これからも、継続して、じつくりと、話し合いを行なっていきたいと思う。

今、わたしにとって書くことの意味 —— 小田晶子

話すこと、書くこと、ことばで表現することの苦手意識は、大学院に入って一層強くなった気がする。このたった一枚の「近況」を書くことさえ苦勞する自分が、果たして修士論文を書き上げることができるのだろうか、考え出すと頭がぐらくら

してくる。

自己紹介にはじまり、ゼミでのコメント、発表・・・正直ことばで表現することは、わたしをとて居心地悪くさせる。しかしながら、ごくたまに自分の思っていることや考えが表現できたと思うこともある。そのような感覚をもてるのは、どんな小さいことでも、やはり自分の根っここと結びついたことばを探し出し、それをなんとかことばにでき、そこにいる人に受け止めてもらったと感じたときである。

先学期はいわゆる「帰国生」と呼ばれる学生を対象にした「総合」に参加した。活動中、自分の根っここと結びついたことばを探す彼らの傍らで、やはりわたしも自分の根っこに結びついたことばでコメントがしたいとわたしのことばを探していた。

海外で長期間生活をし、教育を受けて、日本に「帰ってきた」彼らは、周りで接触する「日本人」に差異を感じ、国籍は「日本人」、でも「日本人」であることに違和感があるという共通した問題を抱えていた。そしてその一方で、自分の根っこを下ろす場所をどこかに探し求めているようにもみえた。「日本人」って誰のこと？「日本人」ってみんな同じなの？自分のもつステレオタイプについて考えを促す働きかけが行われた。人はひとりひとりちがう、確かにそうだ。でも、そんなことはみんなわかっているような気もした。「日本人」とコミュニケーションがうまくいかない、深くならないのは、自分のなかに「日本人」のイメージの壁を作り上げてしまうからだ。だから、自分で作った壁を壊して、乗り越えなければ、解決しない・・・確かにそう言うのは簡単だ。だけど、それが頭でわかったからといって、そんなに簡単に乗り越えられるものではないだろう。

「イメージの壁」・・・それは彼らの問題であり、わたしの問題でもある。

今、わたしにとって書くことの意味、修士論文を書くこと、それは自分の中にある壁と向き合い、それを壊すための作業なのだと思う。そして、それは自分の根っこにつながっていると感じるものを率直にことばにして、自分の外に表現することを繰り返すことで、溶けていくのだろう。自分の外に根っこをおろす場所はない。わたしにとって、わたしの根っこを自分の中にたく、強く、元気に育てるために、今書いて、表現することの意味があるのだと自分を励ます今日この頃である。

お隣の国にて —— 狩野倫子

この3月から韓国の仁川外国語高校で日本語科の学生1年生から3年生まで総勢300名、「600の瞳」と日々奮闘している。名前を覚えるのが苦手な私は、真正面

から「先生、私の名前はなんですか」ときかれ冷や汗をかいている日々である。そして私はどのような教室を開きたいのか、私はここで何をしたいのか、日々自身に問いつつ、試行錯誤しながらなかなか思うようにいかない毎日である。いや、思うように行くほうがおかしいのかもしれない。相手は人間。計画通り、予定通りにいくのは学生をみていないのだ。でも何を指すかその設計ははずせないぞ。むむむむ・・・。そうこうしている間に、あっという間に1ヶ月半がすぎてしまった。

先日何人かの学級担任の先生からプリントの束を突然手渡された。はじめに私に手渡した先生が、私が韓国語を理解できないので説明しても無駄だろうと思ったのか、なにも言わずに手渡すだけ手渡して去ってしまった。

え？なんだろう？と調べてよく見ると、そこには学生から私宛のメッセージが日本語で（ときどき英語、韓国語まざりもあり）綴られていた。後から確認したところ、どうやら「読書の時間」とやりに数ヶ月に1度、学生は書きたい先生1人にむけて手紙を書く習慣があり、そこで書かれたものらしい。そこには「日本語をいっしょうけんめい勉強して上手になりたいです」「日本語クラスおもしろいです」といったものから、「先生ともっと話したい」「先生の教え方が上手か下手によって生徒の学力が違うことがある。わたしはあなたをしんじます」とドキッするようなメッセージ等がそれぞれに書かれていた。

そして意外だったことは、普段積極的に授業に参加したり話しかけてくる学生よりも、普段の授業では寝ていたり、英語で応答したり、静かだったり目立たない学生からのメッセージのほうが多かったことだった。私は彼らのそんな「何かを伝えたい」という意志が秘められていることに気づかずにいたことを知る。授業をひっぱっていくこと、進めることで精一杯で、彼らの「何か伝えたい気持ち」に向き合えていなかったことを知る。

まだ始まったばかりと思っていたら、もう来週は中間テスト。互いに伝えたい気持ちを秘め、考えていることを発し、そして互いの関わりに意味を見出し、教室がひとつのコミュニティとして機能する・・・「前途多難」だけど、そんな教室に少しでも近づけるように、せっかく出会った学生との時間を大切にがんばっていきたい。理想と現実の安易な二項対立に逃げ込まなくなった自分に気づく。（どうやら今日私は元気らしい）

慣れないことだらけで、余裕のない日が続く毎日ではあるが、1年後が楽しみでもあり、かつとても恐ろしくもある今日この頃である。

私は大学院で何を学んでいるのか ― キム ヨンナム

大学院に進学してもう1年半がたってしまった。一人の人間の人生からみると、1年半という年月が占める割合はごく一瞬に過ぎないかも知れないが、私自身がこの期間、大学院で感じて、考えて、学んだことは、決して時間や金で引き換えるものではないと、最近になってしみじみと思っている。大学院生活は、もうあと6ヶ月も残っておらず、そのうち、ろくな論文が出せそうにもなく、頭を抱えている日々であるものの、だからといって、大学院にまで進んで勉強を続けていることを1秒たりとも後悔したことはない。それどころか、最近「教える者」としての考え方や志がぐんと成長したような自分自身に気づき、驚いたりする。

実は、大学院の進学を決めたころ、私の中には教育者として、もしくは日本語の教える者としての自分などは存在しなかった。ただ、大学までの専攻が日本語であって、これを何とか自分の職につなげようとしたとき、容易くできるだろうと思ったのが日本語の先生であった。自分は母語以外にも日本語という言語が使えるから、この特技を生かして人に教えていくことで食べていこうと思ったのである。今振り返ってみると、途轍もなく安易な発想でよくも大学院にまで進んだなあと思う。しかし、いざ大学院で出会えたのは、すでに「教える」ということについてはっきりとした自己の哲学を持ち、日ごろからの疑問をどうにか解明しようと、研究し続けている人々ばかりであった。彼らと、研究について、また、教えることについて話し合うたびに、安易にもこれで食べていこうと思った不純な自分の動機が恥ずかしくてたまらなかった。

最近私は、修士論文の執筆のために、去年の秋に行われた授業を分析しているところである。先輩の方々たった一つの授業に関して、膨大な量の授業の記録と他の諸資料などを残しているが、それ一つ一つに丁寧に目を通して見ると、教える者としての彼らの信実な姿勢や様々な苦勞、また目に見えない努力までもがうかがえて、おのずと頭が下がるのである。

私は、大学院で何を学んだのか？きちんとした専門的なレベルの学問はもちろんのことであるが、それよりも「人が人を教える」という行為が持つ意味とその重さについて、ここに来てはじめて深く考えさせられたと思う。大学院に進学する前まで私にとって日本語は、「自分のできる特技」の一つであって、自分で日本語を教えるということとはただ「生計を立てる」ための一工夫に過ぎなかった。しかし、今私にとって、日本語を教えることの意味は、このような単純なスキルの活用や個人の

生活のための方便ではない。大学院で私が見て、感じて学んだことは、第二言語としての日本語教育には一人一人の人間をさらに成長させてゆく無限の可能性が含まれているということである。人が他の人々を成長させる、また、そのために働く。もちろん、この行為には大変な責任が伴われるものであって、果たして今の私自身にはそれに応じる資格があるのかと、自問してみる。

人々のそれぞれの成長を手伝い、またそれにより私自身ももっと成長していきたい。これが、いま私が大学院にいる理由であって、このことがわかったことだけでも大学院で勉強した甲斐はあると考えている。

さくら咲き、さくら散り、そして私の中に結んだ実 —— 古賀和恵

今年の東京の桜はとても早かった。お風呂場の窓から見える神田川沿いの桜が日々むくむくとピンクの房を下げ、満身のエネルギーをあたりに振りまく3月、私は大学院を修了した。

人と人がじっくりと向き合える仕事がしたいと思い、養成講座で学んだ後、日本語教育の世界へと足を踏み入れたのが3年前。しかし、授業準備に追われ、目の前のことをこなすことに精一杯になる中、私はやがて自分がどこへ向かっていけばよいのかが見えなくなっていった。日本語能力試験や大学入試を見据えながら文型や漢字・語彙をどのように導入し、練習すれば使えるようになるのかを考える日々が続くうちに、私がやりたかったことはこういうことだったのだろうかという思いが強くなっていった。そして、行き先を見失った私は呆然と立ち尽くしてしまったのである。大学院へ行こうと思ったのは、日本語教師として遅いスタートを切った不安から、少しでも就職に有利なようにという甚だ短絡的な理由もあったが、自分がどのようなところに立ち、どちらに向かって歩いていくのかをしっかりと考えたいという思いからであった。

大学院での2年の間、ことばとことばの教育について考え、模索する時間を持つことができた。十分とはとても言えないが、少しずつ自分の中で考えを積み重ねていくことによって、しっかり足を踏みしめて、遠い遠いはるか先の光をめざして歩いていける気がしている。日本語を学ぶ教室という、ある限られた時間と空間で出会う人たちとともに、私には何ができるのか。自分の力量でできることといたらたかが知れている。しかし、たまたま出会った者同士が「わたし」の言いたいこと

を言い、同時に、あるいはそれ以上に「あなた」の言いたいことに耳を傾け、それぞれの違った、場合によっては対立する考えの中から新しい考えを見出していくこと。自分の言いたいことを声高に主張するのではなく、一人ひとりの中にあるものを見つけ、そこから新たなものを生み出していく可能性を実感できること。そうしたことが少しでも実現できればと思う。

しかし、これからの実践の日々は、この2年間で少しずつ積み上げてきたものが壊れていく日々になるだろう。教室は常に多様で流動的であるからだ。足元がぐらつき、はるか先の光が淡くぼやけていく中、私はまた3年前と同じように呆然と立ち尽くすのだろうか。恐らくそうはならないだろう。それは、今の私には問いを立てることができるのではないかと思うからである。細川先生のもと、言語文化教育研究室で私が学んだ最も大きなことは、「問いの立て方」である。何を疑うべきか、哲学者の西研さんの言う、どのように問えば根っこから考えることになるのか、ということに常に意識していれば、少しずつまた新しい方向を見出していけるのではないかと思う。そして、それを一人ではなく、同じように問いを抱いている様々な人とともに考えていけばよいのだということを知ったことは、私に大きな力を与えてくれた。

修論が書けずに苦しんでいたころ、お風呂場からの桜はピンクから緑に変わり、やがて茶色くなり、枝だけになっていった。そして今またピンクから緑へと変わり、その葉を風に揺らしている。毎年同じサイクルを繰り返しているように見えるが、桜も少しずつ成長していつているのだろうか。来年再び桜がピンクに染まるころ、問いと実践を繰り返しながら、私も少しは根と枝を広げられていれればと思う。

文献

西研 (1998). 『自分と世界をつなぐ哲学の練習問題』 NHK 出版

日本語ボランティアと社会 —— 武 一美

2005年度春秋のβクラス担当で、「教室の社会化」について、考え、話し合い、発表・論文を書いた（論文は執筆中）。夏休みも春休みも、「社会化」で終わったのだが、おかげで色々な意味で整理ができた。

10年以上前から、日本語ボランティアといわれる場に身をおき、このボランティアの場は一体なんだろうか？ とか、ボランティアってなんだろうか？ とか考え

てきた。ボランティアについて考えるのが面白くて、日本語ボランティアを続けてきたのかもしれない。ボランティアといっても、様々な場があり、それがなんなのかは、一概には言えないだろう。しかし、ボランティアを考えると、社会というのは1つのキーワードなのではないだろうか。ボランティア=社会参加 などといわれることがあるが、このときの社会はすでに存在するもので、そこへ「すいませーん」と言って入っていく感じがする。

一方2005年度のβクラスでは、学生たち自身が言葉を通して教室に社会を作っていくということを実感した。そして、社会とはすでにそこにあるのではなく、作っていくものだと考えてみると、色々なものがすっと納得できた。日本語ボランティアという場は、そのときの構成員によって、日々作られていて、その構成員は、自分が属するその他の社会とは異なる新たな意味をもった1人の人として存在する。大学生も高校の教員も、日本語教師も、高校生も。例えば、私は日本語教師だが、ボランティアの場では1人のボランティアであり、それ以上でも以下でもない。そこで出会った子どもたちを満足させられなければ、その場は成立しない。子どもは正直だし、学校ではないから、その場には色々な抑制力がなく、崩壊はあっという間だ。まあ崩壊しても、それはそれで、子どもたちは楽しそうなのでいいのだが。

その場の構成員が社会を刻々と作っていく、という目でボランティアの場を見渡してみると、参加者がなんらかの行為をもってお互いにつながり、社会を作っているのだと思えた。社会に入るのではなく作っていくと考えると、社会を作る行為にどのように主体的に参加者が関わっていけるかのということが重要になっていくだろう。いま、その行為の具体的な形を模索している。

2006年春のクラスが始まった。今度は、どんなことをこのクラスで実感できるのだろうか。予想される困難はたくさんあるが、その後にはどのようなものを担当者が得られるのかは、未定である。乞うご期待。

「当たり前」を問い直そう。日本語学習者はどうして日本人に評価されなければならないのか。—— 鄭 京姫

ある授業で、一般日本人は何に注目して日本語学習者の文章を読むのかを調査、分析し、読み手意識の大切さを、今後の作文指導を考える上で重要であるとした目的を持っている論文を読んだ。その論文は、二人の韓国人の日本語学習者が、夏休

みに自分のホストファミリーの夫婦が、韓国に旅行しようと思うので、アドバイスを
する内容の文章を書かせ、一般日本人がそれを読んで感じたことや問題をインタ
ビュー調査したものであった。そして、授業中、私たちも日本語学習者が書いた文
書を読んで、感じたことを自由に発言した。

「決してという表現が気になりますね。えっ、みんな「決して」とか使うんで
すか?・・・」

『超』は年上には使わないのに」気になりますね。

「～してみたら」「～てほしい」が気になります。

『あそこ』という表現はちょっと・・・」おかしいですね。

私はその時、問題を挙げている人たちより周りの反応を見てみた。「そうそう」
と言わんばかりの表情でうなずいたり、笑ったりしている人々の中で、私はどうし
て日本語学習者は日本人に評価され、笑われなければならないのか、と手を挙げ言
いたかったが、喉が詰まって声がでなかった。なぜか、いろいろと問題が挙げられ
るときに「きっと私の文章もどこかで誰かにこう言われるんだろう」と思い、自分
が恥ずかしくなってきたからだ。

授業に参加している人は殆どが日本語教師で、日本語教師になろうとする人たち
なのに、どうして、そんなに細かいところにしか目がいかなく、「おかしい」「気にな
る」といったあら探しに夢中になっているのか。探して、なんか「やったぞ!」
という感じもした。アドバイスをする彼らの気持ちはなぜ感じないのか。文章を書
いた学習者は二人とも「9月はまだ暑いので半そでの服を持っていたほうがいい」
という気遣いをしていたはずなのに。

日本語教師の中の多くは「当たり前」になっている考えを持っているのではない
だろうか。

学習者の間違いを直す、いや教師である日本人に直されるべきである、という
「当たり前」。学習者の表現に日本人からみて気になり、それは通じない、という
「当たり前」。また、その根っこに潜む「非母語話者だから」、という「当たり前」。
このような「当たり前」が大前提となり、日本語学習者は「非」母語話者という枠
に括られ、「非」ではない日本人に評価されないといけない、という「当たり前」を
次々と繰り返して生み出し、いつのまにかその当たり前は「常識」となっているの
ではないだろうか。

私は、日本語教師、語学の教師だからこそ「当たり前」から離れて、自分の理念
を持ち、そして実践を通して常に「なぜ」と「どうして」の疑問を問い直していく
姿勢が必要であると思う。

その時、先生からの一言を思い出す。「日本語教師だから皆さんは違いますね!」。その言葉は、「よくできました」ではなく、「日本語教師だから当たり前のようにみなさんは直すところだけに気が向いていますね!」というニュアンスに聞えたが、その言葉を聞いた、他の人たちはどう思ったんだろう。

「当たり前」から離れ、疑問を持ち続けていく教師。そう、私はそのような教師になりたいと、その授業後、強く思うようになった。

山を創る楽しさ —— 橋本弘美

いま、「仕事が楽しい!」と感じている。

やるべきことは次から次へと山のようにあって、課題も山のようにあって、机の上は文字通り「紙の山」で、現在勤務している大学も小高い山の上にあって・・・と、山・山づくしの中で感じているのは、「ああ、楽しい!」ということだ。どんなに帰りが遅くなっても、睡眠時間が少なくても、ご飯をゆっくり食べられなくても、「ああ、楽しい!」。我ながら不思議である。このエネルギーはいったいどこから来るのだろうか?

私は、この4月より生まれ故郷の北海道に7年ぶりに戻り、大学の短期留学生担当となった。現在勤めている大学では、北欧の協定校の学生を1 Semester毎に受け入れて、彼らに15週間の留学プログラムを提供する。今学期の留学生は全員で9名である。教員は、私と、もうひとりの先生—私がかつて日本語教師を志したときに養成講座で教えてくれた素敵な先生(大山隆子先生)—の2人。授業は先週の金曜日にスタートし、まさに動き始めたばかりである。

この短期留学生の15週間のプログラムを、大山先生と一緒に何度も何度も練り上げて来た。いつも細川先生のことばの「自分の教室活動をどのように設計できるか」を念頭に置きながら、ひとりひとりの個性が生きるクラスを考え、教室で目指すものを話し合い、それに向かって案を出し合い、意見を述べ合い、授業の計画を立ててきた。そして確認と合意を何度も行いながら、それら一つずつ積み上げて、二人で一つの目指す『山』を形づくってきた。しかし、「出来上がった!」と思っても、「この教室で/この授業で/この時間で目指すもの」に再度照らし合わせてみて、そこに少しでも矛盾があると感じたとき、私たちは潔くその山を叩き壊してきた。確認と合意を繰り返しながら作り上げても、全体を見ると、ずれてしまっていることがあるのだ。積み上げてきた案を壊すのは、勇気のいることである。しかし、「この教室で目指すこと」に方位磁石を合わせ、矛盾を壊し、また創り上げ

るとい話し合いの過程の中にこそ気づきがあり、その学びの中に自分たちの教室活動を「設計」していくのだということを知った。

「山」は、そこに存在しているのではない。自分たちの手で創っていく過程の中にできてくるのだろう。私は、今、大山先生と共にそのプロセスの中にいる。だからどんなにやるべきことや課題や紙の「山」があっても、自分自身も「山を創っている」と実感できていることが、仕事の楽しさとながっている。15週間後、どんな山が完成しているか、今からとても楽しみである。

(北海道東海大学 国際文化学部短期留学生部門) hirominghh@ybb.ne.jp

青い雪が溶けて —— 宮口さや子

また桜の季節がやってきた。去年の今頃、大学院進学のために上京した私は、東京の桜の早さに驚いていた。北陸育ちの私には、散り急ぐ桜や街ゆく人々の春コートがまぶしく映ったのを覚えている。そして、今年の桜も去年にも増して早かった。春休みを地元でのんびりと過ごし、上越新幹線に乗り、早くも散り始めていた上野に戻ってきた私はまたその早さに驚いた。「トンネルを抜けるとそこは雪国だった」という有名なフレーズと反対のルートをたどってみると、そこは桜吹雪だったという感じ。北陸にはまだ春の雪が残っていたというのに。

今年の冬、新潟を始め全国で記録的な豪雪に見舞われた。当然地元でも一冬の間中、雪の話題で持ちきりだった。「早く春になってほしい」「でも雪解けの被害も怖い」みんなの悲痛な声が毎日のように一で流れた。ある時、山間部の人が話していた中に「青い雪」という言葉が出てきた。30年近く雪国に住んでいた私だが聞いたことがない表現だった。祖母に尋ねると、雪深い山の方の人が使う言葉じゃないか、この辺では使わないという答えが返ってきた。しかし、祖母にも私にもどんな雪かは容易に想像できた。湿った重い雪のことじゃないかと。そう。一度に大量に水分の多く含んだ雪が積もると、雪の内部が青く光るように見えることがある。青いといっても淡い青、けれどとても深くて冷たい青。小さい頃の記憶が鮮明に蘇ってきた(後でネットで少し調べてみたが大体当たっているようだった)。「青い雪」という言葉はその言葉を聞いた瞬間に私にぴったり入ってきた。そう。その通り。私もそう表現したかった。そう思っていた。言葉が自分の思いとぴったりする感覚は今年の冬一番の感動だった。これまでも雪と共に生きている人は、雪の色や形を様々に表現してきただろう。自分達の雪への思いを言葉にしてきた。雪の恵みへの感謝と災いへの恐怖。「青い雪」という言葉が私の中に響いてきた時、私の中で何

かが少しずつ溶けていくのを感じた。

正直、私は雪が好きではない。毎日の雪かきや交通麻痺には心底まいる。今や関東の雪のない冬の快適さを満喫している。しかし、春、桜が咲き誇る季節になると、雪国の雪を、「青い雪」を私は思い出さずにはいられない。桜の美しさやはかなさは長くて深い雪の存在なくしては語れず、一冬を耐え抜いた雪が美しい桜を咲かせるのだといってもいいかもしれない。雪と共に生きる。それは、言葉と共に生きること。豪雪の今年、「青い雪」との出会いは私にそう感じさせてくれた。

「青い雪」もすっかり溶け、4月のある晴れた春の日、私は22号館横のグランド坂を歩きながら、葉桜を眺めている。修士課程2年目の桜の色を私なりにどう表現しようか。来年の今頃、この桜をどう表現しているのだろうか。「青い雪」のようにぴったりの言葉を見つけていきたい。

「書くこと」、それは未来を開く扉 —— 村上まさみ

この3月、2年半の学生生活に終わりを告げました。3月25日、細川先生から重い「学位記」とともに「おめでとうございます」ということばをいただいた瞬間、わたしは言いようもない緊張感に身を包まれました。

2年半の言語文化教育研究室での生活は、これまでの私の人生でも超級の過酷な日々でした。笑うこと、食べること、寝ることをこよなく愛する私が、笑うことを忘れ、寝ることを恐れ、食べることを面倒にするようになるなど、一尤も、最後の点については、ごくごく一瞬ではあるものの――まさに前代未聞のできごとでした。けれども、一方で、それを心から愉しんでいた自分がいたことも確かです。切望し、ようやく踏み込んだ日研での大学院生活は、求めれば求めるだけの物が返される手ごたえに、夢中になって体当たりしました。あまりに突進しすぎて、脳震盪を起こすことはしばしばでしたが、みなさんの温かい支えをいただき、何度も息を吹き返すことができました。とりわけ、細川先生には、この迷える大羊 ― 一期目は“中羊”と言っていただきましたが、美容を損ね、今やすっかり巨大化してしまいました― の迷走をまるごと受け止めていただきましたことに、心から感謝しております。

なんとか修士論文を完成させて知ったことは、「書けた」と言えるのはまだまだ先だということにほかなりません。この修士論文は、とにかく、これまで長いこと抱えてきたもやもやした意識が「ことば」という形をとって表れたものという位置づけのものです。他の人に見ていただけるようにするために、さら「内容とこと

ば)を吟味・検証を重ね、今後の継続的に研鑽を図らなければなりません。まずは、「ことばにしたこと」に自分自身で応答を試みるつもりで、これから、少し時間をかけて、じっくりと自分の修士論文と向かい合っていこうと思います。そこから、また書く作業に取り掛かってみようと思っています。なんとか「書けた」と思えるものをまとめ、皆様に受け止めていただき、ご批判をいただくこと。それが、目下の私の目標とするところです。

先週から、早稲田での教室実践が始まりました。日々は様々な悩みの連続です。けれども、悩むことを恐れず向き合っていきたいと思います。悩みを記述してこそ、ものごとを展開するチャンスをつかむのだということを学んだことこそ、私が研究室でつかんだ最も大きな学びです。

インターンシップに思う。—— 森元桂子

二月に、インターンシップのコメンテーターをさせてもらった。私の心にはいつも、日本語教師の経験が無いにも関わらず、のうのうと授業をしているという「負い目」と、他の院生のように、積み上げの弊害や不自然なコミュニケーション等を、この身に実感できるほど「日本語教育」を知らないという思いがあるので、自身の勉強のために、インターンシップに参加してみたいと思った。またこれは、専任の先生方の、授業に対する考え方を知ることができる貴重な機会だとも思った。だから、私が「コメント」するなど、百年早いことは重々知っていたが、各回の授業参観に、自分なりの教案を作って臨み、コメントのやりとりを、自身の案の振り返りにも活かすことにした。

かくして参加したインターンシップでは、様々な授業を見せてもらい、参考になるコメントも多数聞かせてもらって、本当に多くのことを考えることができた。インターンの方々熱心に圧倒され、自分のたるみを反省できたことがまた大きな収穫だったと思う。

ただ一つ、インターンシップを通して残念に感じたことがある。それは、インターンシップが、即戦力を求めるあまりに何かを急ぎすぎるものに見えたということである。一年目の人と数十年の経験者とは違って当然なのに、長所を伸ばすよりは、短所を突くことで、インターンの意欲と自信を殺いでしまう気がしたのだ。実際、インターンの中に日本語教師を断念しようと考えた人もいたという話を聞いた時は、とても心が痛む思いがした。

高校で教育実習を何度か引き受けたことがあるが、教育実習は、教師の仕事や楽

しさを味わわせる体験に過ぎない。自身のことを振り返ってみると、自分を育ててくれたのは、やはり本物の現場での日々の真剣勝負であり、どうしようもない失敗や未熟さや間違いをも大目に見つつ、実にくだらなげことや愚かしいことを一生懸命やっていた私を温かく見守り、「いい仕事」を間近で見せ、一緒に考えて助言してくれた同僚の先輩方だったと思う。今思えば、彼らは、いい意味での勘違いをたくさん与え、根拠のない自信を私に持たせて、仕事の世界にぐいぐいと引き込み、いつしか私を「自分がやらなきゃ誰がやる?!」という思いにさせてくれた。

生徒の場合にも、部活で「君、朗読いいかも」と大意もなく声をかけた生徒が、すっかりその気になって全国大会まで勝ち進んだとか、長たらしい文章の生徒をとりあえず「味がある」とほめてみたら、急に文芸部を作り出し、ガツガツ勉強し始めて、到底無理なレベルから、早大二文に合格してしまったという嘘のようなことが時々起こる。人を暗示にかけて治す「にせ薬」というものがあるそうだが、必要なものを抽出したサプリメントを摂ることが必ずしもベストではなく、時には「にせ薬」を飲んだり、栄養になるかどうかかわからない様々な食べ物を、とにかく食べてみたりすることが、健康と元気につながるということもあるのではないかと思う。

重要なのは、まずは、本人が物事を自分の意志で楽しめるだけの自信を持てるようにし、自らそれを充実させることが面白くて仕方がないという次元に持つていくことではないだろうか。また、転ばぬ先の杖を急に色々揃えて、転ばないお利口さんに仕立てるよりは、覚束なくても自分の足で歩いて、思い切りきちんと転んで、その痛みや転んだ意味や訳を胸に刻むことの方がずっと大事だと思う。私の好きな **BUMP OF CHIKEN** も「(転んだ血が) 固いアスファルトの上に雫になって落ちて 今まで どこをどうやって歩いてきたのかを 教えてる」と歌っている。自分の血でしか恐らく道は出来ないのだろうと思う。

しかし、教師一人一人(特に経験の浅い教師)が様々な冒険をするには、職場に、安心して何度も転べるだけのキャパシティがなければならぬだろう。それは、転んだ者をしっかりと寛大に受け止め、フォローできるだけの確かなチーム力と言うこともできる。教師同士のチームワークがよい学年ほど、文武に優れた結果が出るというのは、以前の職における一つの定説であった。これは、子どもの成長と家庭の在り方との関係と相似する。

学習者は敏感だ。だから、教師間のコミュニケーションが確かな輪を形作れてこそ、学習者のコミュニケーション能力も培われていくに違いない。勿論インターシップでの学びも少なくないが、経験豊かな講師の方々も数多くおられる現場で、

教師全体の成長を視野に入れた、温かい育みの場を日々形成していくことができれば、どんなに素晴らしいだろう・・・生ぬるいようだが、私は、できるならばそんな職場を作る一員でありたいと思う。

王様になりたくないのに —— 山本冨里

フランスの QUIMPER という街に来て半年が経ち、私は最近、ほとんど興味のなかった「評価」について考えるようになりました。チームティーチングでもなく任される範囲が大きく、学外で日本語を聞くことも無いここで働いていて、気が付いてみればクラスで「何を目的・基準に」「どのような活動をして」「どのように評価するか」を自由に決めることもできる立場にいるわけで、怖いな・・・と感じています。

「何を目的・基準に」「どのような活動をして」「どのように評価するか」。この三点の決定権は、立法・行政・司法の三権に例えられるかもしれません。王様になりたくないのに、三権が分立しないまま手許にあります。

どうしよう？ と対策を探るうちに、二つの方法が浮かびました。一つは授業記録や実践報告を書いて外部に批判的検証を求めること、もう一つは学習者と評価権を共有することです。

評価権を共有する理由には、主体的な学習を促したいという希望もあります。先学期は「評価」の対象と基準を学習者と共に作ってみました。直接の契機は「あなたは先生で僕は学生だから、僕はあなたに言われたことを何でもやる。シェーバーで髭をかるのと同じように」という学習者の言葉でした。学習者は学習という行為の権利主体ですが、同時に責任主体でもあるはずですが。シェーバーよりももっと主体的な学習を促すための方策として、「評価」の権利と責任とを分かち合うことは有効なのではないか、と思いついたのです。

学習者に好評ではあったものの、好評が主体性に直結するわけではないから、この思いつきはこれから検証していく課題です。

学生たちの寮は、教室から徒歩一分もかからないところにあります。授業だけではなく、パーティーも遠足もしょっちゅうです。公的にも私的にも時間を共有することの多い関係の中で、あと半月のうちに、今学期の授業が終わります。

シェーバーのようにやると言った学習者は、一人称に「俺」を言う人でした。私は公的な時間でのそれに強い拒否感があり、だから、使わないでくれませんか、と頼みました。彼は『俺』と『私』の違いは格好良さだけだと思っていた」と驚き、

以来、私と話す時には「俺」を口にはしません。

私は拒否感の理由を説明し、それは受け入れられたようでした。けれど実際のところは、私の「俺」感を無理強いしたのも同然です。「先生に言われたことを何でもやる」という学習者が、私に、「日本語」に関する事で何か言われたら、逆らえるものではありません。それなのに、私は「俺を使わないで」と始めてしまった。この言葉と、学習者により主体的になってほしいという希望は、どこかで矛盾しているように感じています。矛盾していないにしても、整理した方が良さそうです。この学校でこのクラスでこの人にとって私はいったいどういった存在だったのか、考えようと思っています。
(saerine@hotmail.com)

仕事と私 —— 山本 玲

昨年10月から実践研究フォーラムの事務アルバイトとして、学会事務局や自宅で資料作成をしている。この春休みは査読会議があったので、合宿後は休む間もなく資料作成に追われた。その作業は、始まった当日からエクセルとの闘い変わった。パソコンに詳しい人ならばものの半日もあればできるような単純作業だろう。しかし、エクセル嫌いの私にはそう簡単に作業が進むわけがなかった。私は質問魔と化し、事務局の担当者や自宅の父を、パソコンがあるところへ呼びつけては幾度となく呆れさせた。

「このこれとこれがくっついてるのはどうやったらできるんですか？（セル結合のこと）」

「なんでここだけ止まっているの？（ウィンドウ固定のこと）」

「AだけとかBだけとかに並べたいんだけど（ソートのこと）」

ことばを知らないものだから、「こそあど」と自分の知っている範囲のことばを駆使してなんとか自分のやりたいことを伝えた。今思えば、なんとくだらない質問（内容もさることながら、質問の仕方でもある）をしていたのかと絶望する。

やっとの思いで一覧表を完成させた翌日、査読会議があった。

「これすごく見やすかったです。本当にありがとう。」

会議室へ足を運ぶと、委員会の先生からこんなことばをかけて頂いた。ものすごく嬉しかった。月並みだけれど、今までの苦労が吹っ飛ぶというのはこういうことかと体感した。

学生時代にもアルバイトはしていたし、報酬はなくても色々な局面で誰かに何かを任されたことはある。そこで誰かに「ありがとう」と言われたことがなかったわ

けでもない。だが、このときばかりはただただ純粋に嬉しさがこみ上げてきた。

私のした仕事は、送られてきた資料をコピー&ペーストして、きちんとした体裁に整えるという至極地味で単調な作業だ。それでもその過程では、見る人にとって一番必要な情報は何なのか、どうやったら見やすいレイアウトになるかなど、担当者とのアイデアを出し合い相談を重ねながら作り上げた。傍から見ればただの一覧表かもしれないが、私にとってはたくさんの人と一緒に協働して作り上げた、一つの作品なのである。自分の手で作ったものが誰かのもとに届き、その誰かからちゃんと届いたというサインが送られてきた。そのサインを受け止めて初めて、私は自分のしたことに実感と誇りを持つことができたのだ。

今までの経験から「仕事」というと、与えられたことをただこなすだけというどこか機械的で無機質なイメージを持っていた。確かに世の中にはそういう地味な仕事もあるだろうし、地味な仕事の方が多いのかもしれない。だが、仕事それ自体は地味かもしれないが、それでも誰かが必要としているからその仕事が存在するのである。私とその仕事に従事することによって、どこかで私の仕事を受け止めている人が必ずいるのである。そう思ったときに、「仕事」というのは決して無機質なものではなく、誰かが誰かへとつないでいく有機的な連鎖の中に存在するものなのではないかということに気づいた。

この4月からは学内、学外ともに新たな「仕事」が始まるし、事務アルバイトはこれからも継続してある。私の「仕事」は必ず誰かのもとに届いているんだということを忘れずに、責任を持って取り組んでいきたい。

一寸光陰一寸金 —— 陸 麗青

「一寸光陰一寸金」・・・

子どもの頃から聞き古されているこのことわざは今の私の心境にぴったりすることばである。

光陰矢のごとし、修士課程の最後の一期がやってきた。今のわたしはパソコンに向かって修士論文のデータ分析に没頭する毎日を送っている。膨大なデータをきれいに整形するのは本当にたやすいことではない。しかし、データに向き合って、文字化したり、考えたり、表現したりしていくサイクルに次第に慣れてきて苦しんでいるながらも充実した日々である。この修士の2年間の成果をどこまで仕上げることができるのかわたしにとってこれは今の一番大きなチャレンジである。

昨日、遠方にある大学時代の親友から電話をもらった。「あのおう、ねえ、わたしは

あと3ヶ月赤ちゃんを産むよ！」彼女の相変わらずの陽気な笑い声が聞こえて、彼女の喜びが伝わってきた。「怖くない？」と聞いたら、「全然よ、私の気分が赤ちゃんに影響するから、わたしは毎日ハッピーだよ」と答えた。そのことばの中ですぐ母親になる彼女が自分の赤ちゃんへの愛情が込められていると感じた。しかし、彼女の不安は隠し切れないが、彼女の前向きな姿勢と赤ちゃんに対する愛にわたしは感動してたまらなかった。

彼女の電話のあとに再びパソコンを開けて、データ分析に取り組み続けた。そのときに、いつもの焦燥感はなく、落ち着いて考えることができるようになった。不思議なことに、自分の文章にわたしの気分が表れていることに気づかされた。よくよく考えると、実はすべての表現されたものはその表現者がそれに注いだ愛と力を如実に表せるのだ。親友の話からわたしが学んだのは自分のやっていることに対して責任感を持つべきだということである。

最後に、残りわずかのラストスパートでこの2年間にいいピリオドを打てるように思考と表現の循環を気持ちよく繰り返していきたいと考えている。

心の糧 —— 林 逸菁

大学院を離れてから早くも半年が過ぎた。この半年は正直に言って、思考が欠けていた。書くことも怠った。そして、時々、日本語教育研究科に入った一期目のとき、細川先生が「大学院で二年間訓練された書く能力は卒業後何もしなかつたら、一年間でゼロに戻る」といった言葉を思い出し、大学院で得たものがゼロになるのは、カウントダウンの時間があとどのくらいあるのかを数えてみる。同時に、自分がそのような状況に陥っていることを隠したく、この恐れを自分の心の奥に蓋を閉めようとする。

しかし、『言語文化教育研究』に投稿することのお陰で、安逸な日々の中にだんだん薄れていく言語文化教育に対する情熱が、執筆しているうちに少しずつ甦ってきた。そのきっかけはメルマガの『ルビ言語文化教育』にある言葉に刺激され、生まれたのである。「現実と理想は違いますよね」という言葉である。それは、みんなの日本語症候群という細川先生の論に投げ出した皮肉な批判である。私はその言葉に胸が刺された。なぜかという、恥ずかしいことに、大学院を出て台湾に帰った私が理想から離れて、現実近づいたと思ったことがあるからだ。つまり、私は無意識のうちに細川先生のもとで学んだことを理想とし、これから接触する台湾における日本語教育の世界を現実とし、両者を分けて考えたのである。このような考え

方は上記の皮肉な言葉とまったく同調なものだと言えるだろう。私は総合活動型日本語教育が理想論だという口実を逃げ口とし、固有の言語教育の制度に妥協しようとするつまらない人間になってしまうところだった。幸いなことに、その皮肉な言葉を読んだ瞬間、自分の臆病に気づいた。そして、メルマガに書かれた細川先生の記事に心が打たれ、自分の理想が何だっただろうと修士の二年を振り返ってみた。

台湾で暮らしている今は規律で平和な生活を送っているが、生活の中で心を動かせることは正直に言って少ない。それに対して、言語文化教育研究室の活動に参加した間、特に実践研究に関わった際に、心も体もぼろぼろになることが多く、美容に全然よくないのに、寝ることも食べることも惜しんで活動に夢中になっていた。その唯一の理由は活動のメンバーと話し合うたび、お互いの言葉を読むたびに、鳥肌が立つほどの感動が絶えずに起きていたからである。そのような感動は私をいろいろな人と強く結びつけた。それを思い出すと、胸が熱くなる。そのようなものは私にとって心が潤う大事な糧である。そのような感動をたくさんの人に自分の肌で感じ、覚えてもらうことは私の願いだった。自分の心が動いたからこそ、自分の学習動機も他人に対する関心も高まり、よい連動が起きるだろうと私が思うから。そうだ。それが私の理想だったのである。

このように筆をとるうちに、私の頭の中で飛び交じる断片的なものが一つのものになってきて、じっくりと自分との対話ができた。今、私は現実に向き合う力を獲得し、自分の描いた理想を何らかの形にして、心の糧をより豊かにしたいと思っている。

「壁崩し」 —— 渡貫善華

日記は遠慮なく自分の気持ちをぶつけられる手段である。嫉妬心や怒り、嬉しかったことなどとても感情的なことから人生の答えを模索する内容まで飾り気ない自分の気持ちを書き留めるものなのだ。日記になにが辛いのか、わからないのか一生懸命に文章にして書いてみようとする。

しかし、書いてすっきりしようとした気持ちとは裏腹に書き留めたとり止めもない文章をみてイライラが募ってしまう。これじゃない・・・私が書こうとしたのはこんなちっぽけなことではないと書いては消し、書いては消す。その繰り返しで残るのは結局不完全でみつともない気持ちだけが露になっているだけ。

なぜ自分がいいたいこと、表現したいことがうまく書けないのか。

この文章を書いて、自分の拘りを目の当たりにしてしまった。「うまく」書け

ない。

そう。うまくということに執着していたから最近、日記と正直な気持ちで向き合えなかったのではないだろうか。大学院に入って、NJBという授業に参加したことを思い出した。そのとき、私は自分自身の出来によって価値を見出すのではなく、ありのままを受け入れる姿勢をもつという結論を出したはずだったのに、また出発点に戻ってしまった気がした。前回の完璧な自分という呪縛から今度はうまくという言葉に形を変えた新しい鎖をつけて進もうとしていたのだ。

原点に戻ろう。

うまく書こうとするまえに、いいたいことや表現したいという気持ちをまず考えよう。

格好悪くても、完璧でなくても、それも自分の気持ちの表れ、自分の産物であることに

目を逸らさず書いていこう。

すぐ「完璧」という壁にぶつかってしまう自分を奮い立たせ、諦めず壁崩しに挑み続けて行くことと日記に大きく書き留めてみる。修士1年目の終わりには壁を取り払い前に進んでいる自分を思い描きながら。